

十勝岳の火山活動に関する火山噴火予知連絡会会長コメント

昭和63年12月20日

気 象 庁

十勝岳では、本年10月以降地震が活発化し、火山性微動も観測されるようになり、気象庁及び北海道大学では監視を強めていたところ、12月16日及び18日に26年ぶりに噴火した。

19日21時48分頃火柱を伴う噴火をし、小規模な泥流も発生した。

この噴火後、火山性微動も起きており、引き続き火山活動が続いている。

この火山は、1926年の噴火に際し、泥流による大きな災害をおこしており、積雪期の噴火に対しては、特に警戒が必要である。

今後も、火山活動が続くと考えられるので、引き続き、厳重な警戒が必要である。

十勝岳の火山活動に関する火山噴火予知連絡会会長コメント

昭和63年12月25日

気 象 庁

十勝岳では、19日21時48分頃火柱を伴う噴火をし、小規模な泥流が発生し、その後も引き続き降灰が確認されていた。さらに、24日22時12分頃に噴火をし、泥流が発生した。また、25日0時49分頃から火柱をあげて噴火した。噴煙の高さは、1000mに達し、火山雷も観測され、泥流が発生した。昨日および本日の噴火は、一連の十勝岳の噴火活動の延長上にあると考えられる。

今後とも噴火と、泥流の発生の可能性があるので、厳重な警戒が必要である。

十勝岳の火山活動に関する火山噴火予知連絡会会長コメント

昭和63年12月29日

気 象 庁

十勝岳は12月16日の第1回の噴火以後本日までに5回の噴火があった。気象庁では11月15日臨時火山情報第1号を発表して以来、今日まで20号の情報を発表し、12月24日から25日にかけては3回にわたって火山活動情報を発表して、厳重な警戒を呼びかけてきた。また、この間活動状況に関する会長コメントを12月20日および25日に発表した。12月16日に62-II火口から小規模な水蒸気爆発が始まった。19日からはマグマ水蒸気爆発を起すようになり、火砕サージおよび小型火砕流の発生を伴うようになった。最後の噴火は12月25日00時49分ころであり、その後も活発な噴煙活動を続け、火山性微動も観測されている。

これら最近の火山活動および現地調査結果の概要を述べる。

一連の噴火活動に先立って昭和60年ころより、十勝岳は活動の兆候を示していた。さらに本年9月下旬ころより地震活動が活発化を示した。また、12月5日ころより黒灰色をおびた噴煙が見られるようになり、微小な火山性微動も観測されるようになった。

12月16日から25日にかけての5回の噴火はいずれも地震と微動を伴った。噴火の直前に地震や微動

の発生する例もあったが、それらの発生様式は異なっており、その現象のみで噴火の時期や規模を予測できるものではなかった。噴火に続き発生する微動は12月19日および25日の場合、長時間にわたり継続した。

震源の多くは今回の噴火口である62-II火口を含むグラウンド火口域に集中しているが、旧噴火口域および西山麓にも分布している。

12月19日21時48分ころに始まった噴火では火砕サージが発生し、62-II火口から北方へ約800m、幅最大500mにわたって積雪の表面を溶かした。このため小規模な泥流を誘発し、前十勝北麓の谷沿いに約600m流下して、その末端は海拔約1400mの山腹まで達した。

12月24日22時12分ころの噴火では再び火砕サージが発生した。ついで25日00時49分ころの噴火では火柱および火山雷を伴い小型火砕流が発生した。火砕流は62-II火口から北方へ約400～650m流れ、ついで一部は火口から最大約1km流下し、海拔約1360mの山腹で止まった。火砕流の末端付近の温度は60時間後で最高92.3℃であった。この火砕流では泥流が発生しなかった。

12月27日朝の観測によれば火口上約800mの高さに達する噴煙を噴き上げていた。また、現在も火山性微動が断続的に発生している。

以上のこと等から、今後も火山活動が続き、泥流の発生の可能性があるので、観測の強化とともに厳重な警戒が必要である。

十勝岳の火山活動に関する火山噴火予知連絡会統一見解

平成元年 2月10日

気 象 庁

十勝岳は昨年12月16日の第1回の噴火以降、本日までに20回の噴火があった。気象庁では11月以降今日まで49回の臨時火山情報及び7回の火山活動情報を発表して厳重な警戒を呼びかけて来た。また12月20日、25日、29日には火山噴火予知連絡会会長のコメントを発表した。

初期の噴火は水蒸気爆発であったが、12月19日以後はマグマ水蒸気爆発が発生するようになり、12月19日の噴火では火砕サージ及び泥流が発生し、12月25日、1月16日及び2月8日の噴火では小型火砕流が流下した。その後も62-II火口から噴火活動を繰り返している。また常時500m程度、時には1000m程度に噴煙が上がっており、夜間には同火口等で時々火映が見られており、依然として活発な火山活動が続いている。

昨年9月下旬から次第に増加した地震は、現在なお高い活動状態を継続している。震源の多くはグラウンド火口域に集中しているが、旧噴火口域および西山麓にも分布している。また12月以降は頻繁に微動が観測されている。

以上のこと等から、今後も火山活動が続き、火砕流や泥流の発生の可能性があるので、観測の強化とともに厳重な警戒が必要である。